

一、要 旨

第二章 第四十四軍の狀況（附圖参照）

第一節 第四十四軍の編成より蘇聯參戰迄の狀況

獨軍降伏沖繩玉碎等情勢の急變に伴ひ當時關東軍最大の弱點にして空白地帯たりし西方外蒙古方面に對し新一軍を編成して南滿要衝に對する直接の脅威を除去する事は愈々其の緊急の度を増加せり。茲に於てベスト流行地帯にして且砂漠地帯たる興安南省及興安西省地域に從來専ら中南滿地域の防衛に任じありし關東防衛軍司令部を改編せる第四十四軍司令部及阿爾山地域に在りし第七師團並新に北支方面より轉用せる二箇師團を配置することゝなれり。此の配備變更に伴ひ從來關東防衛軍の任じありし中南滿地帯の防衛及熱河省に於ける共產軍討伐の任務は齊々哈爾より奉天に移駐せる第三方面軍に於て繼承することゝなりたり。

第四十四軍を配置せらるゝ迄に西方正面に在りし兵力は阿爾山附近

の第百七師團熱河省に共產匪を討伐中なりし第百八師團の二師團の
外滿洲國軍が興安附近に約一箇師、洮南及通遼附近に各約一箇旅（
何れも蒙古軍一程度配置せられありしに過ぎずして作戦準備、防衛
態勢の整備等は殆んど白紙より出發せりと言ふも過言にあらず。
第四十四軍の主力たる第六十三師團及第百十七師團は何れも北支に
ありて討伐警備に任じありし部隊にして其の編制も歩兵二箇旅團（
箇旅團四大隊一砲兵隊、工兵隊、輜重隊といふ特別の編制にして火
砲の如き^も兩師團併せて山砲十八門と言ふ状態なり。
第六十三師團は六月中旬に^白第十七師團（歩兵の半部を除く）は六
月下旬に夫々北支よりの移駐を完了し爾后邊境の不利、資材の不足
滿東軍最後の動員の爲の幹部及兵員の轉出等多くの困難を克服して
作戦準備及訓練に努力せるも其の成果は八月初旬に於ては尙極めて
不十分なるを免れず。

軍直轄部隊中駭車旅團及砲兵諸部隊の大部は七月上旬及下旬に編成

せられ或は移駐せるものにして裝備の不足、訓練の不十分等何れも其の戦力は大なる期待を掛け得ざるものあり。

兵站諸機關も亦七月中旬頃海拉爾、齊々哈爾より軍作戦地域内に移駐せるものにして漸く其の業務緒に就かんとして開戦となりたり。之を要するに第四十四軍は編成以來二箇月にして開戦となり其の任務達成の困難なる推して知るべきなり。

二 第四十四軍司令部の編成經過及戦闘序列の下令

ノ爾東防衛軍司令部は支那方面よりする米機の鞍山大連等に對する爆撃により關東軍の兵站基地たる南滿の防衛漸く重大化せるを以て昭和十九年九月新京より奉天に移動し専ら南滿各重要都市の防空、治安維持及熱河省の八路軍討伐作戦に従事しありしか、昭和二十年四月蘇聯參戰の機漸く近づくに拘はらず西方面に於ては外蒙方面よりの攻撃に對し僅かに赤峰及林西に夫々第百八師團の一箇大隊及一中隊を配置せらるゝのみにして滿洲の動脈たる連京

線は直接敵の脅威にさらされある状態なりしを以て關東防衛軍司令官は任務達成上此の正面強化の要を痛感し關東軍總司令官に意見を具申するところありたり。

2. 關東軍に於ても戦局最後の段階に立至りたる時機に於て總軍長期持久態勢に移るに決し「三號演習」を令し新態勢に移行せんとし五月十日松村參謀副長及宮田參謀（竹田宮中佐）來奉し「興安附近の一箇師團に支那方面より移動し來る約二師團を加へ新一軍を編成して西方に對する態勢を整ふる筈にして之れが軍司令部には關東防衛軍司令部を充當し關東防衛軍司令部の後に江齊々哈爾より第三方面軍司令部を移駐任務を繼承せしむる案にて目下大本營と交渉中」なる旨を述べ更に三號演習の構想を傳達す。

3. 次で五月二十日に至り右案を實行するに決定せる旨連絡あり。更に翌二十一日には第三方面軍司令部より防衛軍司令部の廳舎官舎等の視察に來り二十五日には防衛軍は移動せよとの要求あり。

軍は此れより先關東軍參謀副長の内示に基き參謀長等を派遣し軍司令部、兵團配置等を偵察せしめたる結果鄭家屯に軍司令部を置き第六十三師團は司令部を通遼に隸下部隊を鄭通線沿線に、第十七師團は洮南に司令部を隸下部隊を四洮線沿線に配置するを適當と認め關東軍總司令官に意見を具申し認可せられたり。

又五月二十七日軍司令部は一部を鄭家屯に先發せしめ二十九日來奉せる第三方面軍司令官に關東防衛軍の任務を引継ぎ、又地區防衛部隊、防空部隊及警備隊等は現態勢のまま、第三方面軍司令官の指揮下に入らしめたり。

五月三十日軍司令部主力は奉天出發六月一日鄭家屯に移駐を了し直ちに業務を開始す。

六月五日新に第四十四軍戰團序列を令せられ、同日新軍司令部の編成を完結し且第三方面軍司令官の隸下に入り新戰團序列に基き統帥を發動す。

第四十四章 戦闘序列左の如し。

第四十四軍司令官

陸軍中將 本郷 義夫

第四十四軍司令部

第六十三師團

第一百七師團

第一百七師團

獨立戦車第九旅團 (30/7 編成、増加)

獨立速射砲第二十九大隊

第二遊撃隊 (30/7 増加)

野戦重砲兵第十七聯隊 (甲)

野戦重砲兵第三十聯隊 (乙) (30/7 編成増加)

獨立重砲兵第六中隊

獨立野砲兵第十四大隊

電信第三十一聯隊

特設警備第六百五中隊
 同 第六百七中隊
 同 第六百十九中隊 ($\frac{30}{7}$ 増加)
 同 第六百四十三中隊 ()
 同 第六百四十四中隊 ()
 同 第六百四十八中隊 ()
 兵站部隊
 特設陸上勤務第二百二十七中隊
 兵站勤務第七十五中隊
 獨立自動車第一百十二大隊 ($\frac{30}{7}$ 編成、増加)
 同 第二百七十七中隊 ($\frac{30}{7}$ 補給艦に轉屬)
 獨立輜重兵第七十三中隊
 患者輸送第五十五小隊
 建築勤務第四十中隊

同 第八十二中隊 (30/7 三十軍に轉屬)

水上勤務第四十中隊

建築勤務第八十二中隊 (30/7 三十軍に轉屬)

水上勤務第四十一中隊

阿爾山陸軍病院

白城子陸軍病院

海拉爾第二陸軍病院

第十九野戰兵器廠用 (移動修理班一欠)

第十九野戰自動車廠用

第十九野戰貨物廠用 (移動修理班一欠)

三、軍隷下部隊の配置

八、第百七師團は主力を阿爾山地帯の一部を五叉溝、杜伯斯附近に配置し齊々哈爾に搜索隊及糧重隊を殘置しありしが軍は長期持久の爲に其の主力を五叉溝附近既設陣地に後退せしむるを可なりと認

め、遼東軍總司令部に意見を具申し認可を得て六月中旬同師團主力を五又溝に移駐せしめ、且既設陣地を一箇師團に適合する如く編成を指導す。尙齊々哈爾に殘留しありし搜索聯隊及輜重は之を五又溝附近に集結せしむ。軍司令官は六月下旬第百七師團を初度巡視す。

2. 第六十三師團は六月下旬北支方面より逐次移駐し師團司令部及主力を通遼附近に一部を開魯及鄭家屯、鄭通線沿線に配置し約一週間を以て移駐を完了す。其の隸屬變更時期は六月十九日とす。

七月上旬方面軍命令により歩兵一大隊を第百八師團長の指揮下に入れ熱河に於ける對八路軍作戰に従事せしむ。

3. 第百十七師團は北支に於て老河口作戰に従事中轉進命令を受領し敵の抵抗を排除しつゝ、原駐地信陽附近に集結六月中旬滿洲に移駐を開始し師團司令部及主力を洮南附近に一部を以て白城子及四洮線沿線に配置し六月下旬移駐を完了す。其の隸屬轉移の時期は六

月二十九日とす。但し歩兵四箇大隊は依然北支に残留し作戦に從
事中なりき。

第六十三師團及第百十七師團の配置は主として作戦上の必要並に
交通補給の關係を考慮し豫め軍に於て決定せるものなり

4. 軍直部隊

電信第三十一聯隊は中支より轉用せられ六月中旬八面城に移駐す。
野戰重砲兵第十七聯隊は第三軍隷下より軍の隷下に入らしめられ
七月上旬開原に移駐す。

獨立速射砲第二十九大隊は七月上旬洮南に移駐す。

第二遊撃隊は從來通り興安に位置す。

5. 兵站諸部隊

滿東防衛軍は從來より補給諸廠を有せず且僅かに野戰道路隊及若
干の輸送部隊、陸軍病院を有せるに過ぎず。新戰團序列による兵
站諸部隊は殆んど他の兵團より轉屬せられたるものなり。

第十九野戦補給隊

第四軍の轄下を脱し原駐地たる海拉爾、齊々哈爾地區より野戦兵器廠及野戦自動車廠は四平附近に本廠を、野戦貨物廠は鄭家屯に本廠を其の支廠を五叉溝、洮南、通遼附近に夫々七月中旬迄に配置し補給に従事す。

第四十七野戦道路隊は三月以來通遼に駐屯し、通遼―開魯間の道路の整備に任じあり。輸送部隊たる獨立輕重兵第七十三中隊は七月初旬鄭家屯附近に移駐す。

衛生部隊は七月中旬迄に原駐地海拉爾より移駐し各兵團駐屯地に配置して患者収療態勢を確立す。

兵站勤務隊は鄭家屯に七月中旬移駐す。

四 作戦準備

1. 作戦計畫

六月五日第四十四軍司令部の編成は完結を見たるも上級司令部より

りの作戦計畫は示されず。軍は取敢へず新に到着する第六十三師團及第七十七師團の諸部隊も白城子、洮南、鄭家屯、通遼附近鐵道沿線に配置し爾後の状況の變化に應ずることとせり。六月十四日軍司令官關東軍總司令部に集合せしめられたる際作戦計畫案の内示あり。

茲に於て軍は豫て作成しありし作戦計畫腹案を具體化するに努め七月上旬兵團長會同を鄭家屯軍司令部に於て實施し其の席上之内示す。

軍作戦計畫の骨子左の如し。

一 方針 第七師團をして五叉溝及興安附近の既設陣地を確保せしめ爾餘の兵團を以て四洮線及鄭通線に沿ふ交通の要衝を確保し之を據點として敵の前進を拒止す

二 指導要領の大綱

一 交通の要衝に陣地を編成し之を據點として其の周邊半徑約二

十軒の地域に於て遊撃戦を実施し敵此の據點を迂回せば其の後方を攻撃す

2 軍直砲兵は第六十三師團及第六十七師團に分屬して白城子、洮南、鄭家屯、通遼等の據點の骨幹たらしむ

3 戦車旅團は一部歩兵と共に白城子飛行場附近に移動トシテ方式に配置し敵の落下傘部隊に對せしむ

4 五叉溝の既設陣地は兵力に適合する如く改築す

5 興安附近に於て敵の迂回を阻止する如く陣地を準備す

2. 防衛

軍は鄭家屯移駐と共に第七師團と交代して西部防衛司令部となり興安西省、同南省、龍江省泰來縣、四平省遼源縣を其の防衛管區とす。防衛管區は滿洲國行政區劃と一致し七月中旬一部熱河省と興安西省との境界に於て若干の行政區劃を變更して防衛管區と一致せしむ。又作戰上の考慮に基き第七師團第七師團第六

十三師團を各々地畧防衛擔任部隊とし兵團作戰地域と防衛地域を
一致せしめたり。七二

七月中旬第三方面軍司令部より防衛計畫の大綱を示され之に基き
軍の防衛計畫を作成し八月四日參謀長合同の際部下兵團に示達せ
り。但し必要なる事項は六月上旬以降逐次指示ありたり。

西部防衛地區防衛の主眼は、作戰計畫に基き軍防衛地區内に強固
なる遊撃據點を設置すると共に適時適切なる情報収集に遺憾な
からしむるにあり。之れが爲各街、村は夫々其の周辺及部落内要
點に壕其の他の障礙物を設けて敵の攻撃に對抗せしむんとし特に
民心の把握に留意する如く指導せるも、實際には何等見るべきも
のなく全波或況の不利及物資の供出人員徵用の過度により民心は
完全に離反し遊撃據點の構成等は机上の空論に過ぎざる状態なり
き。

從來滿洲防衛の重點は南滿に指向せられありて西部地區は單に支

那方面よりする南滿及新京方面に對する防空の爲の補助的役割をなしあるに過ぎず。従つて防空態勢は待機状態にありたるも通信網の整備は全く不良なり。軍は人口僅少廣漠たる地帯に於て現在配置せられある防空監視哨を戦時に於ける地上情報収集並に遊撃戦に利用せんが爲監視哨の配置變更及之に基く防空及警備用通信網の増強補修を計畫せるも資材不足の爲意の如く進捗せず。

軍は又開戦時に於ける敵側謀略の激化に備へ憲兵、鐵道警護隊及滿洲國軍等に對し主要交通線、動力源、建造物を掩護する爲兵力の配置警備計畫等の指導をなせり。

滿洲國行政機關就中軍防衛地區の大部を占むる興安省の省公署の所在地は興安にして連絡上不便なるを以て六月中旬興安總省より連絡員として鄭家屯駐在參事官を派遣せしめたり。

防諜に關しては五月以降特に軍が西部地域に配置以來外蒙よりする武装諜者の潛入活潑となりしを以て特に各兵團に防諜對策の徹

底を要求すると共に國境監視隊及國境警察隊に之れが発見逮捕に
努力しめたり。

3. 新施設及築城舊施設の處理

第四十四軍司令部は遼東防衛軍の常時熱河省林西地區の國境陣地
の維持増強、中南滿地域に於ける高射砲永久陣地の構築、軍司令
部内防空指令所の構築、安東及旅大地區の對米作戰の爲の陣地構
築等に任じありしが軍司令部の鄭家屯進出と共に此等の作業を第
三方面軍に引繼ぐと共に新作戦地域に於ける築城に着手せり。然
れども各兵團に於ては大梯尺の地圖なき状況にして自ら測量を實
施しつゝ陣地を構築する状態なりき。

五叉溝附近の既設陣地は周圍八十軒もありて甚しく過分散しあ
り。第百七師團は自ら師團の兵力に適合する如く改築に着手せる
も同地區の諸作業は築城資材特に爆薬、穿岩機の不足に依り甚だ
しく困難にして開戦當時に於ける強度は野戦陣地程度なりき。

0551

爾餘の兵團正面は廣漠不毛の平原地帯にして而も築城資材の補給は皆無なりしを以て軍は白河線沿線白狼附近に於て森林を伐採し築城材料を補給せんとし七月下旬第四十七野戰道路隊の主力を派遣し且輸送の爲八月に入り第百十七師團の輜重一中隊を軍直轄とし同じく白狼に派遣せるが此の輜重部隊は輸送途中興安附近に於て蘇聯參戰となり原所屬に復歸し、野戰道路隊も亦原駐地に歸還せしめたり。

敵の迂回を考慮して滿東軍は興安附近に滿東軍築城隊及滿洲國軍をして築城を實施しつゝありしが殆んど其の緒に就きしばかりにして開戦となりたり。

軍の重視しありし遊撃戰の爲の諸施設も偵察の途上にあり軍戰團司令所も鄭家屯西南附近に偵察中開戦となりたり。

後方關係

第四十四軍の配置迄何等の準備なき地域に新に兵團の移駐を見且

一切の後方諸部隊を他兵團よりの轉屬に據らざるを得ざりし軍の
兵站整備は特に輸送力の不足により多くの時間を空費し困難を極
めたり。第十九野戦補給諸廠の軍轉入に際しては人事、資材の舊
位置残留に關し關東軍及其の原所屬たる第四軍との交渉に多大の
時間と努力を費し、常備補給の爲の諸廠の展開は概ね順調に進捗
せるも作戦計畫に基く軍需品の集積は其の緒に就かんとして開戦
となりたり。新に移駐せる兵團及諸部隊の收容施設は越冬を顧慮
する平戦兩用の準備を餘儀なくされたるも既設施設による收容力
は所要の三分の一に満たず。依つて主力は三角兵舎、幕舎に收容
せるも、軍は滿人家屋の構築を準備し關係行政機關の協力に依り
可成の資材を果積し勤勞奉公隊により之れが建造をなさんとし準
備中なりき。

5. 交通

交通は専ら鐵道に頼り鐵道線を離れたる地域に於ては道路網の發

0553

補しあらざりし爲補給困難にして兵團の縦深配置は不可能なる状
況にあり。軍作戦地域内の鐵道は南北に走る平齊線（四洮線）及
之に直交する白阿線並に大鄭線（鄭通線）にして一覽道路は作戦
道路としての價値少く僅かに通遼一開魯間（八十六年）のみは三
月以來の整備に依り自動車道路として軍官民の利用する處となり
たり。軍は補給路設定の爲幹線道路の整備を上司に具申し滿洲國
交通部の擔任として先づ四平一鄭家屯一通遼道を次で鄭家屯一白
城子道を整備する事に決定せるも之れが實施を見るに至らずして
終る。

鐵道業務に關しては軍の管内にある鐵道は北部地域は齊々哈爾濱
鐵支部長に南部地區は在錦洲大鐵支部長の管轄に屬し極めて不利
なりしを以て關東軍に軍管内に強力なる大陸鐵道支部を設置する
か管區を變更するか何れかにされ度き旨意見具申せるも容れられ
ず開戦後兵團の轉進に重大なる支障を生ずるに至れり。

通信部隊は當初第百七師團正面に關東軍直轄の固定通信隊の微弱部隊ありしも軍の移駐に伴ひ器材人員を増強し次で六月中旬電信第三十一聯隊の轉入を得て軍内通信部隊は充實す。

有線通信は既設線を利用し軍司令部、關東軍總司令部、方面軍司令部間及軍内各兵團司令部との間は直通専用線とす。但し第百七師團と軍司令部間は白城子の軍交換を経由す。其の他滿鐵交換及電々交換に加入し副通信的に使用す。然れども既設線は何れも老朽しありて故障多く作戦上極めて不備なりしを以て關東軍に意見を具申して改築増強計畫を立案し滿洲電信電話株式會社をして先づ四平―鄭家屯―通遼―開魯間を次で鄭家屯―洮南―白城子間の増強に着手し四平―鄭家屯―通遼間は殆んど完成の域にありたり。尙電信電話株式會社の通信体系を軍の作戦（防衛）地域に適應する如く一部改組す。

0555

廣大なる軍作戦地域に於て遊撃戦を実施する關係上無線の増加裝備は絶対に必要なりしを以て之れが實現方を露東軍に申請せるも資材不足の爲實現するに至らず作戦間極めて困難を感じたり。

7. 教育訓練

六月中旬軍は作戦計畫に適應する如く教育に關する指示を作成し、隸下兵團參謀長會同の席上之を指示す。

軍教育の方針は遊撃戦に即應する訓練を徹底し對戰車肉迫攻撃の要領を完全に修得せしむるにあり。教育訓練計畫に於ては特に長期に亘る整齊たる教育の實施は時局の進展に伴ひ實情に適應せるを以て短期間に目標を定め實戦即應の訓練を實施し如何なる事態の突發にも適應し得る如く概成し然る後之を補足向上する如く指導す。第百七師團の遊撃戦訓練は軍内中最も優秀なりしを以て第六十三師團及第百十七師團より要員を第百七師團に派遣して教育せり。尙第六十三師團及第百十七師團は何れも北支より轉進せ

る兵團にして遊撃戦は既に實戦により体得しありて將兵共に十分なる自信を有しあり。

然れども對戦車戦闘訓練は十分とは言ひ難く、教育資材の不足に惱まされつゝも各兵團銳意之れが訓練に邁進しあり。軍司令官、方面軍司令官等の巡視の際に於ても常に此の課目につき訓練を實施せしめて指導に努めたり。

遊撃戦訓練の爲七月中旬關東軍に於て機動旅團に實施せしめたる吉林演習は軍司令官及各兵團參謀長之を視察す。七月上旬編成せられたる部隊は以上の外特に團結の鞏化を圖り兵科本然の教育に徹底する如く指導せるも、兵器資材の不足と幹部の素質低下により其の成果見るべきものなりき。

お情報収集

七月上旬第三方面軍司令部より情報収集の計畫示達せられ軍は之に基き作戰計畫に適應する如く情報収集計畫を作成し八月

0557

四日蘇下兵團參謀長合同の際示達す。軍情報収集の主眼の第一は蘇聯の開戦時機看破に置き次で遊撃戦實施の爲必要なる情報収集に置きたり。之れが爲第百七師團は主として國境監視哨により對外蒙情報を爾餘の兵團は各々地區内の遊撃戦情報の収集を主とせしむ。軍として外蒙狀況特にタムスグ鐵道の改軌及延長、外蒙に於ける自動車輸送の狀況等敵の集中状態を知らんと欲せるも對蘇刺戟を避くる爲軍自体による諜報の實施を嚴禁せられしにより六月中旬新に軍の指揮下に入りし興安特務機關をして軍の希望する情報の入手に努めしめたり。

當時蘇軍情報の収集は殆んど滿東軍總司令部自体に於て實施せられ方面軍以下は國境監視哨のみに依存して情報の収集に當りありしのみなり。又阿爾山地區國境には哈爾濱特務機關より派遣せられありし電話盜聽班ありて其の情報ハ軍司令部にも直接受領せり。興安特務機關は機關自体の秘密設計畫を有しみどり工作と稱し軍

管區内に據點を準備しありたり。

八三

國境監視哨の情報は七月上旬より情勢の緊迫化に伴ひ監視隊より直接滿東軍に報告する如く改めらる。

9. 兵要調査

軍は鄭家屯に移駐後作戰地域内の兵要調査極めて不完全なるを知り速かに之が完成を要するを認め、六月下旬各兵團主任者、特務機關關係者、滿洲國軍主任者を司令部に會同し各々に調査擔任地域及目的着眼を示し主として遊撃戰の見地よりする兵要調査に着手せしむ。之れが爲主要交通網、障礙地帯、住民地の状態、民心等に重點を置き第一回の成果は七月中旬提出せられ軍に於て整理を完了し第二回目の調査班派遣を計畫中なりしも實施に至らず。七月下旬漸次情勢險惡となりしを以て外蒙及内蒙より興安嶺を經え滿内に侵入するに便なる主要道路の破壊を立案せるも之が實施の滿内民心に與ふる影響極めて甚大なるものあり且企圖の秘匿に

0559

も支障あるべきを考慮し其の時機を何時に裏定すべきやにつき確
定し得ず、蘇聯の開戦企圖極めて明瞭となる迄之れを延期するに
決し遂に實施の機を失したり。

10. 國境警備

直接外蒙國境に接し居たるは第百七師團正面のみにして該兵團は
散在せる國境警備部隊を逐次阿爾山地區に集結し、國境監視網も
新情勢に適合する如く阿爾山より三國山に至る間に配置換えを實
施せり。尙其の間隙補足の爲滿洲國國境警察隊を配備す。内蒙と
の國境地帯は滿洲國國境警察隊國境警備に任じありて逐次増強せ
られつゝありたり。

五部隊の編成、變動

六月中旬頃より朝東軍に於ては情勢變化に對應する爲根こそぎ動員
を計畫し六月下旬より七月上旬に亘り動員を令せられ軍より新設兵
團及部隊要員として兵員の約十分の一幹部の約三割弱を轉出しその

充足は召集者を以てせられたるか特に各部隊とも幹部の素質低下及
不足を來たし既設部隊の戦力は約三分二に低下す。

根こそぎ動員に於ける兵員の素質は滿洲國政府職員、警察官、特殊
會社従事員等の内必要最少限を残し應役員を最大限に召集したる關
係上極めて不良にして又健康状態に軍務に耐えざるものと認めら
るゝ者以外は凡て入營せしむべき滿東軍の指示に基き召集したるを
以て其の素質の如何に低下しありしやを視知し得べし。

軍に於て動員を管理せる部隊左の如し

獨立戦車第九旅團

編成完結 二〇年七月一日 (四平)

獨立重砲兵第六中隊

編成完結 二〇、七、一〇 (開原)

野戦重砲兵第三十聯隊乙

編成完結 二〇、七、一〇 (開原)

第百七師團挺進大隊

同 右 (五又溝)

新動員部隊は何れも兵器被服の充足は極めて不十分にして戦車旅團
に於ては車載MG不足し火砲彈藥は教育用彈藥を有せしのみにして野

戦重砲兵聯隊及重砲兵中隊は全然火砲を充足せられざるまゝ、開戦となる。關東軍よりは新設部隊の装備の充足は大體十二月末と豫定しある旨示されありたり。

第三十軍の編成に伴ひ同軍の轄下に轉屬せる部隊は建築勤務第八十二中隊及水上勤務第四十一中隊なり（此等の部隊は何れも新京に在りて關東軍の指揮下にありし部隊なり）。

第七師團の歩兵一大隊は遼陽教育隊に派遣中にして開戦と同時に原所屬に復歸せしめたるも輸送途中興安附近に於て敵と遭遇せり。

六、兵器資材の變動

第七師團保有の速射砲は六月中旬増加裝備なる理由により約半数を引揚げられ且同師團砲兵聯隊の一部裝備改編に伴ふ彈藥並に本土への自動車用燃料の運送を實施するの外從來の補給諸廠の端末施設を作戦即應の態勢に變更せり

電信第三十一聯隊の兵器は完全に充足せられありしも關東軍に於て

八六
は通信兵器不足の爲二號無線機二其の他四號五號等の無線機を引揚
げらる

軍の作戦上最も痛心したるは彈藥にして特に對戦車戦鬪用の爆藥は
當初皆無なりしが開戦前迄に約二噸の補給を受け應急の所要に充つ
ることを得たり（補給豫定量は約十噸なり）。

第二節 蘇聯参戦以後の状況

一、参戦直前の蘇聯及外蒙の状況

開戦迄正面中外蒙に於ては外蒙側國境警備隊以外の大兵力を認めず。
開戦後侵入せる蘇軍は滿洲里・カリムスカヤ以西地區のサバイカル
方面軍にして開戦直前に軍正面に進出せるものゝ如し。

六月中旬頃より情報面に於ては外蒙軍兵力集結の状況若干現れ來
りし程度にして東部正面に比し顯著ならざりしも七月中旬頃より
自動車の運行頻繁となり且從來見られざりし外蒙より自動車を以て
する内蒙への越境頻繁となり何等かの偵察企圖を有するものと判断

0563

せられたり。

又五月下旬より外蒙よりする武装諜者の満内越境侵入頻繁となり軍の配置に伴ひ更に活潑化せる如く感ぜらる。武装諜者は日本軍の軍服を着用し且無線を携行し満内深く約百軒に亘り侵入せるものあり。

五月中旬第百七師團正面に於て武装諜者の爲國境監視隊の兵五名中三名殺害二名拉致せられたる事件ありしも此の武装諜者は六月下旬滿洲國國境警察隊に逮捕せられたり。

東部正面に指向を豫想せられし蘇軍の兵力は狙撃約八箇師團、戦車二箇師團、飛行機約一千機と判断せられたり。蘇軍参戦直前に於ても軍の正面國境近く集中又け展開せる如き徴候は全然見受けられず然れども八月九日拂曉第百七師團正面阿爾山國境に展開せる敵が生文により「攻撃準備が出来たら攻撃を開始せよ」と命令せるが如き或は作戦開始後通遼方面に於て水陸兩用戦車を先頭に我の作爲せる氾濫を踏破し又新民附近に於ける大遼河の渡河に之を使用せし等よ

り觀て相當の準備を行ひありたりと認めらるゝ點あり。

八八

二 蘇聯參戰當時の情況

ノ八月九日二時第三方面軍司令部より黒河、東寧、虎頭、滿洲里正面よりの蘇軍の侵入及牡丹江、哈爾濱、滿洲里、海拉爾、新京等の爆撃せられたる情報に接し蘇聯の開戦を知り直ちに隸下各兵團及諸部隊に情報を傳達すると共に緊急態勢に入り、次で三時全滿に防衛を下令せらるゝに及び軍は平時よりの計畫に従ひ即時戦時防衛下令を命令し管内に於ける滿洲國軍、警察、憲兵を防衛に關し軍の指揮下に入れ完全に戦闘態勢に入る。

2. 五時第百七師團參謀長より一阿爾山正面に於ける敵は戦車を有する狙撃約一箇師團にして逐次其の兵力は増加しつつ、あり又三團山南側地區より敵戦車數十輛國境を突破して師團後方に迂回しつつ、あり陣地前に展開しある敵の無線によれば準備完了次第攻撃前進すべく命令しあり師團は蘇軍の眞面目なる攻撃と判断し當面の敵

0565

を陣前に撃破する。旨電話を以て報告あり。

3. 右の外九日中に知り得たる軍正面に於ける敵情左の如し。

(1) 東ウヂムチン―突泉―醜泉―道上を戦車及自動車約千輛東進中。

(2) 戦闘機三機に上空を掩護せられたる機甲部隊(戦車、自動車約

一千輛)ウヂムチン―開魯道上を東南進中。

(3) 外蒙騎兵約一箇師團ウヂムチン―林西道上を南進中。

(4) 尙西部正面に於ける敵情中軍の知り得たるものは吉拉林―海拉

爾道上を南下せる敵機械化約一箇師團、滿洲里―海拉爾道上

を東進する敵機約二箇師團なるものゝ如し。

各軍は方面軍に對し軍正面の敵情を空中偵察により續行せられん事

を要求すると共に右情報に基き洮南にありし獨立速射砲第二十九

大隊を第百十七師團に配屬し同師團をして突泉方面に於ける敵戦

車部隊撃破の準備をなさしむると共に情報の収集を要求す。

第六十三師團に對しては平時計畫に基き開魯附近の橋梁の破壊及

氾濫を機を失せず作爲する如く命令す。

九〇

第三方面軍より偵察機二機連絡用として軍に配屬せられ四平飛行場に位置せしむ。

軍は茅白七師團とは有線、無線により連絡を確保するに努めたるも無線は全然應答なく軍より放送を行ふの外なかりき。

三、爾後の作戦経過

二十日敵情に關しては大なる變化なく、茅白七師團正面の敵は約二箇師團の如きも攻撃積極的ならず。東滿正面に於ては敵の突進急速にして既に穆稜正面に近迫しつあり。海拉爾正面も既に敵の攻撃を受けつゝあり。又愛琿、虎頭正面は國境陣地にありて抗戦中にして盛んに挺進漸込つゝありとの情報に接す。

二十日九時頃軍は「茅白七師團及茅白十七師團及獨立戦車第九旅團を新京に轉進せしめ第三十軍司令官の指揮下に入らしめ、軍司令部、直轄部隊並に第六十三師團は奉天附近に轉進し又新に茅白八

0567

師團及第百三十六師團、獨立混成第百三十旅團、戰車第一旅團を指揮下に入らしむべき一第三方面軍命令に接す。
軍は十時左の要旨の命令を各別命令を以て下達すると共に、鐵道輸送に關し齊々哈爾大鐵支那及錦洲大鐵支那と交渉を開始す。

第四十四軍命令の要旨

- 一、第百七師團は現陣地に於て敵の前進を拒止したる後白阿線興安嶺隧道其他術工物を破壊して敵の前進を妨害し成るべく速かに新京附近に至り第三十軍司令官の指揮下に入るべし
- 二、第百十七師團は一部を白城子附近に派遣して所要に應じ白阿線方面諸部隊の轉進を掩護し主力は速かに新京附近に至り第三十軍司令官の指揮下に入るべし
- 三、第百六十三師團は速かに奉天附近に轉進すべし工兵一中隊を鄭家屯に於て軍の直轄たらしむべし
- 四、(直轄部隊以下略す)

十一時軍高級參謀は第百七師團參謀長に電話により直接命令を傳達すると共に電報し、爾餘の兵團にも各々電話により命令を下達す。第百七師團との電話は命令下達直后不通となりたり。尙念の爲筆記命令を傳令により傳達せしめんとせらるも當時既に白阿線は白狼附近に於て敵戰車の爲遮斷せられ興安は敵の爆撃により炎上しつゝあり且蒙古軍叛亂せる等の状況により之を中止せり。尙軍は通信網の關係上平時より急を要する場合第百七師團に對し關東軍より直接連絡する事を依頼しありたるが同師團との連絡は杜絶せるを以て直接關東軍より連絡せられ度旨關東軍に連絡す。(後日聞く處に據れば第百七師團の無線は受信器は異狀なく軍の放送を受け得たるも、發信器故障しありし由なり)。

3. 十日午後第百十七師團より敵戰車約千輛突泉方向に前進中にして師團は歩兵一大隊及獨立速射砲大隊を洮南西方約三十軒附近に派遣し敵の前進を阻止せしむると共に洮南附近に兵力の集結を圖り

0569

つゝある旨の報告に接す。軍司令官は方面軍司令官より奉天に招致せられたるを以て代理として軍參謀長は十日午後軍司令部を出發四平に一泊の後飛行機により奉天に到る。

八月十一日洮南方面に突進中なりし敵戦車は洮南西方約五十杆の突泉を攻撃し縣公署等炎上中なるも防空電話を利用して連絡中との情報に接し、次で斥候の報告により同部隊は突泉に停止し前進の模様なきを知る。

軍は敵戦車部隊が興安附近に北上して第百七師團の退路を遮断せんとするや又け補給整備の上洮南に向ひ突進せんと企圖するや不明なるも、何れにしても軍の轉進に重大たる支障を與ふるものなる事を憂慮し、第三方面軍司令部に航空攻撃を要求す。第三方面軍よりけ敵機申請隊を第百十七師團をして攻撃せしめ然る後離脱せしめよとの指示ありたるも、攻撃せば師團の整進たる轉進は不可能となるにつき一部を以て敵の前進を拒止し主力は速かに敵を

の離脱を圖るべく第百十七師團を指導す。尙第百十七師團に對し
轉進に際しては洮南附近の飛行場及燃料の破壊焼却軍事營造物を
破壊し敵の利用を妨げる如く指示す。
第百十七師團正面に於ける敵情は全く不明なるも、第六十三師團正
面の敵の行動は緩慢にして同師團は尙敵と接觸するに至らず。第
六十三師團は新開河橋梁を破壊し且氾濫を作成す。
興安憲兵隊長より一白阿線既に自彙附近に於て遮斷せられ且敵部
隊逐次興安に接近しあるを以て速かに後退の命令を出され度き一
旨の電話あり。興安軍官學校の叛亂及爆撃にて治安混亂しある際
憲兵先づ後退するは適當ならざると軍は防衛に關してのみ憲兵隊
を指揮しあるを以て新京憲兵司令官の指示を受くる如く回答せる
も、新京憲兵司令部よりは各軍に配屬せりとの事なり。軍は憲兵
隊の配屬に關しては何等の通報命令にも接せざりしを以て後退に
關しては該隊長の獨斷に任す。

0573

5 八月十二日突泉の敵機甲部隊は依然停止しあり。

軍は齊々哈爾大鐵支部と兵團の輸送に關し配車を極力交渉せるも
第百十七師團の爲の列車を配當し得ず、第六十三師團に對しては
漸く錦州大鐵支部より列車を回送す。

軍は第六十三師團をして轉進に際し爾后に於ける敵との接觸の爲
馬匹及無線を裝備する約十名よりなる將校斥候三組を開魯、彰武
新民、奉天道に沿ひ行動せしむる如く殘置せしむ。又幾に軍の直
轄たらしめし工兵中隊に鄭家屯附近軍事遺物、鐵橋、驛等の破
壞を準備せしむ。

十二日午后より第六十三師團主力は列車により通遼を出發す。通
遼出發當時開魯に敵戰車部隊突入せるも開魯守備部隊は其れ以前
に敵と離脱す。軍參謀長は奉天より鄭家屯に歸り、奉天附近防禦
に關し軍司令官に報告する處あり。軍司令官は其の後方面軍差出
の飛行機により高級參謀と共に奉天に向ふ。軍司令部は十二日夕

刻より列車搭載を開始す。同時頃に至るも第百十七師團の列車に
よる轉進の見込たゞず遂に同師團主力をして行軍によらしむる外
なきに至れり。

二十時頃在新京飛行團より連絡將校鄭家屯飛行場に飛來し、本日
午前突泉に出撃せるも目標発見不能なりし爲引歸せるも、明十三
日拂曉更に約二十五機を以て爆撃するを以て目標位置の指示あり
度との事にて細部を説明す。

軍參謀長は兵站參謀と共に最後の處置をなす爲鄭家屯に殘留し十
三日朝飛行機により出發する事に決す。二十一時頃興安特務機關
長後退し來り、第二遊撃隊は既に活動中にして又特務機關は計畫
に従ひ遊撃戦を実施する旨報告す。

6. 十二日二十三時軍司令部は鄭家屯を出發十三日午後奉天に到着、
直ちに奉天北西部被服會館に入り司令部を假設す。軍は既に偵察
せるところに基き、第六十三師團、第百三十六師團、獨立混成第

百三十旅團、戦車第一旅團を基幹として奉天附近防禦陣地の構築を開始す。尙第百八師團を遼陽附近に使用する爲軍の指揮下に入らしめらる。

十三日午前軍高級参謀は第三方面軍司令部に出頭作戰訓令を受領す。同日午后に至り方面軍は鳳城、桓仁附近に轉進するの企圖を有し同時に方面軍通信参謀を偵察並に準備の爲桓仁附近に出發せしめたるを知る。

尙奉天に到着後方面軍は在奉天部隊の殆んど全部を軍の指揮下に配屬せるも、此等の部隊の指揮單位數は老大にして（約七十餘）掌握極めて困難、中には其の位置も判然せざるものあり。

十四日軍は依然方面軍の訓令に基き作戰準備を續行中、十二時第三方面軍高級参謀より全面的停戦を承知すると共に同日二十二時迄に作戰行動を停止せしむべき旨の口達命令を受領し、直ちに高級参謀を第三方面軍司令部に派遣し細部を連絡せしめ且方面軍司

令部通信網を通じ、隷指揮下部隊に停戦命令を傳達す。

十八時頃軍高級参謀より先刻の停戦命令を取消し依然作戦を繼續するとの方面軍命令の傳達あり、同時に明十五日正午重大放送ありとの連絡あり。

停戦命令或は取消命令と誠に重大事項の輕々たる發令に方面軍に理由を問合せたるところ、先の停戦命令は通化に在る大本營派遣参謀よりの連絡によりしものにして正式なるものにあらず、關東軍は依然作戦を繼續するとの事なり。全般に割切れぬ空氣にて夜を徹す。

四 終戦時の態勢

1. 第六十三師團主力は奉天東陵附近に陣地占領中
2. 第三百三十六師團主力奉天西部地區
3. 獨立混成第三百三十旅團主力 奉天北陵附近
4. 獨立戰車第一旅團 東陵附近

0575

5. 遊撃連隊 奉天西部地區

6. 高射砲部隊は對戰車戰鬪準備の爲主力は奉天市内に位置す

7. 電信第三十一聯隊主力奉天北陵

8. 獨立野砲兵第十四大隊、野戰重砲兵第十七聯隊 昌圖

野戰重砲兵第三十聯隊、獨立重砲兵第六中隊 開原

獨立自動車第一二大隊 鐵嶺

獨立輜重兵第七十三中隊、第四十七野戰道路隊、

建築勤務第四十中隊、特設陸上勤務第一二七中 奉天

隊、白城子陸軍病院、海拉爾第二陸軍病院

9. 第百八師團

遼陽附近

五 彼我の損害

1. 敵に與えたる損害

(1) 阿爾山正面に於ては敵に相當の損害を與えたるもの、如きも細

部不明

(四) 突泉（禮泉）の敵機甲部隊の爆撃により敵戦車約十數輛を破壊せるものゝ如し

2. 我方の損害

(イ) 第百七師團 戦死千餘名（札登特旗に於ける百七師團停戦時に於ける調査）

(ロ) 第六十三師團 戦死數名

(ハ) 其の他白狼附近伐採隊に損害ありし如きも不明なり。

六 終戦時の状況

一 軍に屬する各部隊は一部輸送車^中の部隊を除き殆んど奉天周邊地區に集結したるも、各兵團は何れも新配備につく途上にあり、轉指揮下部隊中第六十三師團と第百八師團を除き殆んど新編成部隊にして裝備はもとより未だ編成途上の部隊もありて其の戦力は二分の一以下なりき。

二 十五日正午軍は放送により終戦を確認せるを以て、通遼、新民、

0577

遼源附近に残置せる斥候、興安特務機關、第二遊撃隊に停戦命令傳達せるに努めたるも、興安特務機關及第二遊撃隊は其の所在判明せず。

斥候よりの報告により蘇軍は既に鄭家屯、通遼に達しあるを知る。停戦の放送ありし後なるにも拘らず、奉天市内の戦車壕構築は依然續行すべく命令せられ又關東軍は大本營よりの命令あらざるにより依然作戦を續行する等と傳えられ、去就に迷ふが如き状態を生ぜるも、軍は放送の趣旨により戦闘行動を停止するに變化なし。

3. 十六日豫め計畫せる處に従ひ司令部を奉天市内朝日女學校に移轉す。軍司令官、參謀長は方面軍司令官、滿洲國第一管區司令官王上將、奉天省次長源田松三等と新情勢下に於ける治安の維持等につき協議す。又第四十四軍司令部は奉天省防衛司令部となり奉天附近に於ける全日本軍戦列部隊及兵站部隊を軍の指揮下に入らしめらる。

0578

第百八師團は遼陽附近に轉進中にして錦州の治安状態不良との報告あり。當時錦州の兵力は歩兵一中隊を基幹とせるものに過ぎず北支に轉戦中なりし滿洲國軍約一万集結しありて叛亂の危険大なりしを以て、軍は居留民保護の爲第六十三師團の一大隊を急派すると共に第一軍管區司令官より滿軍部隊の鎮壓に努むべきを依頼す。

又十七日錦州附近の治安状態依然險悪なりしも滿軍叛亂の危険は若干減少せるもの、如し。

方面軍より滿鐵、電々、電業等滿洲特殊會計關係者の召集解除次第で滿洲に家族を有する者の召集解除並に軍屬の解雇を通告せられ、同日附を以て軍轄下諸部隊の上記召集者を解除す。尙軍紀維持の爲軍法は依然嚴存し軍紀に反するものは處罰せらるゝ旨布告あり。

又十八日錦州の治安は概ね平靜に移行しつゝありしも、奉天市内處々掠奪ありしを以て兵力（戦車）を派遣し暴民を鎮壓す。

諸情報を綜合するに遼東方向より奉天に向ひつゝありし蘇軍機甲部隊は十九日夕刻奉天に到着するの巨艦に在りしを以て、蘇軍進駐の際に奉天西郊地區に駐せしめ混亂を防止し度き考に基き奉天鐵西地區に宿舎を準備す。軍司令部は書類の焼却を行ふ。第六十三師團より派遣せる斥候歸還す。損害は兵五名なり。同斥候の報告により蘇軍の情况及興安特務機關が停戦を知り法庫附近に集結せるを知る。

6. 十九日關東軍司令部より七月十七日附陸密第一四四一五號による終戦により敵手に歸したる軍人軍屬の取扱に關しては國際法上多少の疑義あるも國內的には法律的にも道義的にも捕虜として取扱はざる旨命令あり。又關東軍總參謀長の蘇軍との停戦交渉に關する協定内容を通報し來る。

十九日十一時頃蘇軍々使フリットラ少將は通譯女子大尉及補佐官中佐二名を帶同して奉天北飛行場に到着。其際恰も日本に向け飛

行する爲通化より同飛行場に来り休憩中の滿洲國皇帝一行は滿洲
飛行機會計休憩室二階にて休憩中なりしが帝室御用掛たる吉岡安
直中將用便の爲階下に来りしを發見せられ直ちに飛行機にて蘇領
に送られたり。

其の後軍使一行は第三方面軍出迎えの志位少佐と共に方面軍司令
部に來る。第三方面軍司令部に於ては第三方面軍司令官及幕僚、
第四十四軍司令官及幕僚等會同し停戦後の交渉に入る。

此の日の交渉に於ては蘇軍々使は武裝解除、軍隊移動の禁止及鐵
道運行の停止、通信の蘇軍監理等を要求す。

武裝解除は奉天周邊の日本軍部隊は三分の一の自衛兵器を保有し
（此の點は治安不良により日本軍側より要求）、他の兵器は全て
各部隊の所在地にて引渡すこととなれり。

蘇軍機甲部隊は十八時頃奉天西郊に到着し豫め準備せる宿舎に入る。

7.二十日九時頃より前日の如く第三方面軍司令部に於て交渉を再開

するや蘇軍々使より、奉天市附近の日本軍部及び軍司令部以上の司令部及治安維持のため特別警備隊のみを確保し他は全て三時間以内に奉天北方十六軒の線以北に移動集結すべき要あり。軍司令官は實施不可能なる旨を主張し且特別警備隊のみは武装を解除することなく治安維持に方り且残置兵器監視の爲各部隊所要の人員を残置することを要望し、接衝の結果部隊の移動は六時間以内に他は我方主張の如く認めらる。蘇軍は自ら鐵道、通信機關の接收を開始し宿舍を徵發す。又市内を通行する日本軍自動車は乗用車貨車の區別なく其の場に於て隨時蘇軍兵に徵發せられ、馬匹も亦同様に押えられ其の儘滿洲國人に賣却せらるゝ如き状況を現出す。兵器は逐次自動車により蘇軍は接收せるも途中滿人に小銃彈藥等を與へし爲日本軍兵力の撤退と共に治安は俄然悪化し諸所に暴民の掠奪暴行始まり收拾不可能の状態に入る。

此れより先蘇軍より在奉天將官を第三方面軍司令部に集合せしむ

る如く要求あり。十一時頃第三方面軍司令官より軍使に對し各將
官の紹介ありたる後軍使は蘇軍極東軍司令官奉天北飛行場に到着
せらるゝを以て全員出迎せられ度と稱し直ちに自動車に分乗方面
軍司令部を出發せるも其の後將官は夕刻に至るも歸還せず、憂慮
しありたる處方面軍司令官の自動車運転手逃げ歸り始めて全將官
は蘇軍飛行機により何處かへ拉致せられたるを知る。當時第三方
面軍兵器部長は病氣の爲又工兵司令官平野少將は集合を知らざり
し爲何れも居残り。此れが爲第三方面軍は司令官代理に工兵司
令官平野少將を、第四十四軍は司令官代理に兵器部長竹林大佐を
以てす。

夕刻蘇軍は方面軍司令部を兵舎に使用するを以て即刻移動すべく
要求せるを以て、大山會館に方面軍司令部を移動す。

8. 二十一日奉天附近の治安状態は極めて不良となり、特別警備隊の
約一中隊は奉天驛前にて治安警備中滿人の掠奪を鎮壓せんとした

0583

る際蘇軍戦車部隊の爲に包圍せらる。急報により方面軍司令部は蘇軍に交渉せざるも結局武装を解除せられて包圍を解かれたり。

第一特別警備隊高級参謀大森大佐は、蘇軍の我に拘せる所に違反し且將官等の騙し討的拉致等の状況に鑑み日本軍部隊の將來は如何様になるやも知れざるを以て、速かに特別警備隊の全兵力を千

代田公園に集結し一戦も已むなしと軍司令部に決心を要求し來る。

軍^は事態の重大化に第三方面軍司令部にて緊急會議を開きたる結果、武装を解除せられたる現在一戦を交えたる結果は火を見るより明かにして其の悪影響圖り知れざるにより一部の現象は忍び難く情勢の推移を見るに決し、部隊の集結を取止めしむ。同日夕第三方面軍は特別警備隊武装解除は協定違反なることを交渉せざるも蘇軍側より爾後の市内警備は蘇軍側に於て擔當し、特別警備隊は三分の一の自衛兵器のみを有し殘餘も武装解除し文喜屯附近に集結すべく要求せらる。更に此の日蘇軍は軍司令部奉天に進駐し來る。

0584

奉天附近の兵站諸廠の倉庫は凡て蘇軍の管理下に入るも、文官屯南滿造兵廠及航空廠は蘇軍兵器の修理業務に従事す。

在留日本人より蘇軍の掠奪暴行を阻止する如く陳情切りなるも、蘇軍に交渉せるも何等の對策も講ぜられず。

9. 二十二日午後蘇軍兵二名拳銃を持ち軍司令部に侵入掠奪せるを以て、遂に衛兵之を射殺するに至る。軍は之を蘇軍側に通告し蘇軍衛戍司令官フリツトラ少將直ちに現場檢證に來りしも非は彼にありしを以て何等處置なく歸る。

東陵附近に在りし戰車部隊の内約一中隊蘇軍側に酷使せられ鞭打たる等の報告ありしを以て第三方面軍司令部を通じ蘇軍に再三交渉せるも効果なし。

10. 二十三日軍司令部は舊南滿造兵廠奉天事務所に移轉し其の跡には蘇軍約一連隊入る。

奉天北方に移動せる部隊と連絡せんとして通信線を架設せるも全

0585

て切斷せられ、連絡は徒歩傳令による外なかりしも途中は極めて危険なり。

11. 二十五日第三方面軍は奉天附近日本軍の收容所偵察を蘇軍側と共に開始す。

12. 二十九日在奉天部隊は全て北陵に集結すべきを命ぜられ、軍は軍屬を解散し、北陵收容所に入る準備をなす。

13. 三十日軍司令部主力は同行を希望する女子軍屬若干と共に北陵收容所に入る。

三十一日軍司令部の殘部は北陵收容所に入る。

北陵收容所に收容せられし兵力は先に奉天地區に移動せしめられたる部隊及奉天市内に散在せる通過軍人及南滿造兵廠（蘇軍兵器修理に從事）を除く補給諸廠の軍人、軍屬（一部少年工等）等約二万五千名にして、滿鐵鐵路學院及關東軍通信教育隊に收容せらる。